

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：62601

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2013

課題番号：21240069

研究課題名(和文)「中等教育の多様化」に対応したコア学力の評価・測定を行うための技術的基盤の構築

研究課題名(英文) Research for development of technical basis for the evaluation and measurement of the core academic ability appropriate to its growing diversity in secondary school education

研究代表者

安野 史子 (Fumiko, Yasuno)

国立教育政策研究所・教育課程研究センター 基礎研究部・総括研究官

研究者番号：00370081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 24,400,000円、(間接経費) 7,320,000円

研究成果の概要(和文)：全国規模テストについて、実施要項、実施概要、実施結果が、調査や試験の名称が異なっても比較できるように、また、長期的なトレンドが見えるように整理し、報告書に取りまとめた。そして、それらのリソースを利用し、2011年度及び2012年度に幅広い学力層の大学1年生を対象に、国語と数学について、解答形式とパフォーマンスに関する実証的研究を中心としたモニター調査を実施した。その結果、国語は、選択式の正答率が記述式の正答率を上回る傾向がみられた。数学は、特定の解答形式の正答率が高かったり、低かったりする特徴はみられず、問題の内容、設問の難易度、受験者集団の学力レベルに依存して変化することがわかった。

研究成果の概要(英文)：We collected a lot of copies of the examination paper, implementation guidelines, content outlines, and results of the past nationwide tests. Comparing these different tests, we could see a long-term trend of the national testing. By using the resources, we conducted a monitoring survey of college freshmen with wide range of academic ability in 2012 and 2011. The survey of Japanese and Mathematics was done with a focus on empirical research on performance and answer format. The main results are summarized as follows: (1) We confirmed that the performance of Japanese has a tendency that the percentage of correct answers of multiple-choice is greater than the percentage of correct answers of descriptive. (2) As for mathematics, we couldn't confirm the tendency of higher or lower percentage of correct answers of a specific format. (3) We found that the performance of Mathematics depends on the questions, the degree of difficulty of the items, and the academic level of the examinee population.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育

キーワード：科学教育

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後日本における全国規模の本格的学力調査は、昭和 31(1956)年度に抽出調査で始まった「全国学力調査」(文部省)が最初といえる。それから半世紀以上にわたって、全国規模の学力調査は、抽出調査と悉皆調査を繰り返してきたが、その中で科学的視点での評価・測定法が根付くことはなかった。さらに、経年変化分析を目的とする調査はほとんど実施されてこなかったため、経年変化分析が行えるような評価・測定法の技術的基盤もお築かれていない。

(2) 大学入学者選抜にかかわる共通試験としては、「進学適性検査」(文部省)が終戦直後の昭和 22~29(1947-1954)年度の 8 年間、その後、大学受験のガイダンス・テストとして始まった「能研テスト」(財団法人能力開発研究所)が昭和 38~43(1963-1968)年度の 6 年間実施され、十年近くの空白の後、昭和 54~平成元(1979-1989)年度に「共通第 1 次学力試験」(大学入試センター)、平成 2(1990)年度以降は、「大学入試センター試験」(大学入試センター)となり、現在に至っている。

これらは、文科的問題、理科的問題、一般的问题といった 3 種の問題種別からなる総合試験の類から始まり、教科・科目試験、知能検査及び総合試験を組合せたものを経て、教科・科目のみの学力試験へと移行した。

現行の試験制度になって、30 年以上経過したが、村上・三宅・浪川・安野らの先行研究にもあるように、マークシート形式の是非、制度設計の限界が指摘されるようになり、再考の必要があると考えられる。

(3) 昭和 46(1971)年の中教審答申において「高等学校の多様化」が打ち出され、高等学校での教科・科目選択の幅が拡大し、大学入試の多様化へと波及したが、多様化の下で高等学校卒業時の学力はどうあるべきかという視点での検討がほとんどなされてこなかった。また、「旧来の知識、技能が中心の学力観」から「学習過程や変化への対応力の育成などを重視する学力観」への転換が提起され、思考力や問題解決能力などを重視する方向へと移行したが、「学力とは何か」を問い直し、その中で測定できるものと測定できないものを整理していく必要がある。

(4) 国際学力調査(IEA/TIMSS, OECD/PISA)が国内調査以上に注目をされ、影響力を持つようになったが、国際調査は、教育環境、言語、文化等が異なる国々を 1 次元的な尺度で測定しているため、原理的限界もある。また、欧米中心の国際調査は、出題形式が単問形式で、解答形式が多肢選択式中心であるのに対して、日本のテストは、出題形式が大問形式で、解答形式が客観式、論述式といった記述式が多く採用され、欧米とは異なった独自のテスト文化がある。さらに、「テストの公平性」といったことについては、日本と欧米では、精神構造、社会構造、教育や文化の背景といったそれらを規定する要因が異

なるため、受容も異なる。また、テスト結果の利用法や波及効果も異なる。そのため、わが国における教育評価のあり方は、独自に考える必要がある。

### 2. 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究課題において、過去半世紀で 5 度改訂された学習指導要領と、過去 60 年間で実施された学力調査・検査を精査し、コア学力の規定の検討を行うとともに、様々な点から欧米の測定の技術的な手法をそのまま取り入れることは困難であることを鑑み、わが国で過去に行われた学力調査・検査のデータリソースを活用して、学習評価の立場からの評価・測定のための制度設計、評価の枠組み(教科・科目あるいは総合学力)、測定論といった技術的な基盤の構築を行うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 国立教育政策研究所は、「全国学力調査」、「進学適性検査」、「能研テスト」、「教育課程実施状況調査」といった大規模調査・検査の膨大なリソースを所蔵している。また、大学入試センターは、「共通第 1 次学力試験」と「大学入試センター試験」をあわせて 30 回以上実施し、それらのデータを保持している。これらをいくつかの視点で、系統的な整理を行う。

(2) (1)を踏まえ、それらのリソースを用いて、技術的なことを検証するための調査を実施する。そのために、昭和 22 年度以降の学力調査・検査の問題(教科・科目テスト及び総合学力テスト)の系統的な分類を行い、コア学力を測定するための問題を選び出し、必要に応じて改作を行う。調査目的に即して、それらの問題から冊子を構成し、調査を実施する。特に、解答形式によるパフォーマンスの違いを明らかにするために、大学入学直後の大学 1 年生を対象にモニター調査を実施し、その調査結果をまとめる。

(3) (1)(2)の結果を受けて、わが国に相応しいコア学力の規定、評価・測定を行うための技術的基盤の整備に示唆を与える。

### 4. 研究成果

(1) 本研究課題の前身として位置づけられる研究課題「科学的な評価法及び測定法に基づく日本のテスト文化に適した新しい学力調査の設計開発」萌芽研究(課題番号 20650139)において、中間報告書(2009 年 3 月)及び研究成果報告書(2010 年 3 月)を刊行したが、それらをさらに増補する形で、2013 年 3 月に、研究成果報告書「戦後日本における全国規模テスト 改訂増補第 2 版」を刊行した。それらは、実施要項(実施の経緯、趣旨・目的、内容、実施日、対象学年等)、実施概要(志願者数・受験者数、科目選択者数等)、実施結果(平均点、標準偏差、得点分布、設問ごとの正答率等)が、

調査や試験の名称が異なっても、比較できるように、また、長期的なトレンドがみえるように整理し、取りまとめた。

(2) コア学力の規定、評価・測定を行うための技術的基盤の整備について検討を重ね、高等学校学習指導要領における必修教科・科目の観点から、本研究課題においては、まず、「国語」と「数学」について行うこととした。「理科」についても検討作業を行ったが、高等学校の生徒の科目選択に偏りがあり、現時点で、調査等を行って、実証的な研究を行うのは困難と判断し、今後の課題と位置づけた。

「国語」と「数学」について、(1)の取りまとめを参考に、中等教育におけるコア学力の評価・測定のための問題を、「能研テスト」、「国立大学共通第1次試験実地研究試験」、「教育課程実施状況調査」から、選び出し、必要に応じて改作を行った。目的に即して、それらの問題から冊子を構成し、2011年度と2012年度の2度にわたって調査を実施した。調査の実施概要及び結果は以下のとおりである。

① 調査目的：選択式と(自由)記述式に、国語は条件式(⑤で後述)、数学は穴埋め(マーク)式を加え、3種類の形式の試験によるパフォーマンスの違いを明らかにする。この目的を実現するためには、(i) 同一内容の問題を3種類の形式で作成し、能力が同等と考えられる3つの集団に解答させる、(ii) 1受験者に対して、内容は異なるが3種類の形式の問題を解答させる、(iii) 3つの受験者集団の等質性を検証するために受験者全員に共通問題を解答させる、(iv) 受験者の属性、学習履歴、問題に対する意識等の質問紙調査を実施する、ことが必要となる。

また、質問紙調査によって、試験の形式と調査モニターの高等学校や大学の属性、高等学校あるいは大学入試準備における学習履歴、調査において受験した数学に関する難易度等の意識の間に、どの程度関係があるのかを経験的に確認することを目指す。

② 調査対象：調査対象は、調査年度の4月以降に大学に入学した、調査実施時点で大学1年次の学生(短大からの編入者は除く)で、調査年度の3年度前以降に日本の高等学校(中等教育学校後期課程を含む)を卒業した者(現役～2浪)のうち、募集に応じて調査モニターを希望した者とする。

③ 調査内容：高等学校の学習範囲の数学(数学I・数学II・数学A・数学B)・国語(現代文のみ)の筆記試験及び質問紙による調査。

表1 調査内容

| 教科  | 冊子      | 時間  | 満点   | 2011年 | 2012年 |
|-----|---------|-----|------|-------|-------|
| 国語  | 共通      | 40分 | 50点  | ○     | ○     |
|     | A, B, C | 30分 | 50点  | ○     | ○     |
| 数学  | 共通      | 60分 | 100点 | ○     | ○     |
|     | A, B, C | 60分 | 150点 | ○     | ○     |
| 質問紙 | 共通      | 20分 | -    | ○     | ○     |

表1に示すように、調査目的(形式比較)の実現のために、各教科について、同一内容の問題で、原則3つの解答形式を織り交ぜて難易度が均等になるよう3冊子(A, B, C冊子)を作成し、1受験者はそれらのうちの1冊子について解答をする。国語、数学とも、2012年度調査は、2011年度調査問題と同一であるが、どちらの教科も、一部改良している。

また、3つの受験者集団の等質性を検証するために受験者全員はどちらの教科についても共通問題の冊子に解答する。ただし、共通問題の冊子は、数学は各年度の大学入試センター追・再試験 数学①〔数学I・数学A〕を利用し、国語は2012年度のみで、1982年度及び1979年度 共通第1次学力試験 追試験から現代文1題と古文1題を抜粋したものを利用した。

④ 調査日時：2011年6月～10月(全国のべ12会場)及び2012年6月～11月(全国12会場)の土曜日あるいは日曜日。

⑤ 調査結果[国語]：国語では、選択式、記述式及びその中間的な形式として位置付けられる条件を付した形式(組合せ選択、抜き出し、字数制限、空所補充等。以下、条件式とする)の3形式の比較を行った。2011年度調査では、選択式と記述式の2形式の比較を中心に、一部の問題を3形式にし、パイロット的に調査を実施した。その結果を基に問題を改良し、2012年度調査では、選択式、条件式、記述式の3形式の比較を行った。

表2は2011年度、表3は2012年度の結果である。年度ごとに、3冊子の難易度は等化できていたことがうかがえる。2012年度は、受験者全員に共通問題を解答させ、表3の右4列がその結果である。この結果から、各冊子の受験者集団の等質性が担保されたといえる。図1、図2は、各年度における設問ごとの解答形式別正答率である。

表2 2011年度 国語 結果

| 2011<br>国語 | 比較 (50点) |      |      |
|------------|----------|------|------|
|            | A冊子      | B冊子  | C冊子  |
| 平均点        | 31.1     | 26.4 | 29.2 |
| 標準偏差       | 6.0      | 8.0  | 8.2  |
| 最高点        | 45       | 45   | 48   |
| 最低点        | 8        | 5    | 5    |
| 人数         | 206      | 209  | 211  |

国語については、大方予想されたとおり、ほとんどの設問で、記述式、条件式、選択式の順に正答率が高くなる傾向が観察された。また、記述式において、準正答を設け、正

表3 2012年度 国語 結果

| 2012<br>国語 | 比較 (50点) |      |      | 共通 (50点)        |      |      |      |
|------------|----------|------|------|-----------------|------|------|------|
|            | A冊子      | B冊子  | C冊子  | A冊子             | B冊子  | C冊子  | 計    |
| 平均点        | 29.7     | 26.4 | 27.7 | 31.1            | 30.2 | 30.6 | 30.6 |
| 標準偏差       | 5.1      | 8.4  | 7.2  | 25.0            | 9.1  | 9.6  | 9.8  |
| 最高点        | 44       | 45   | 48   | 47              | 47   | 50   | 50   |
| 最低点        | 13       | 6    | 7    | 4               | 3    | 4    | 3    |
| 人数         | 240      | 233  | 225  | 240             | 233  | 225  | 698  |
| 相関係数       | 0.25     | 0.36 | 0.33 | 共通冊子と比較冊子との得点相関 |      |      |      |

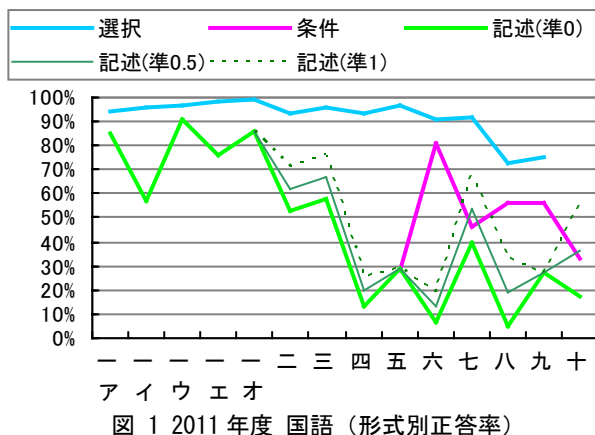


図 1 2011 年度 国語 (形式別正答率)

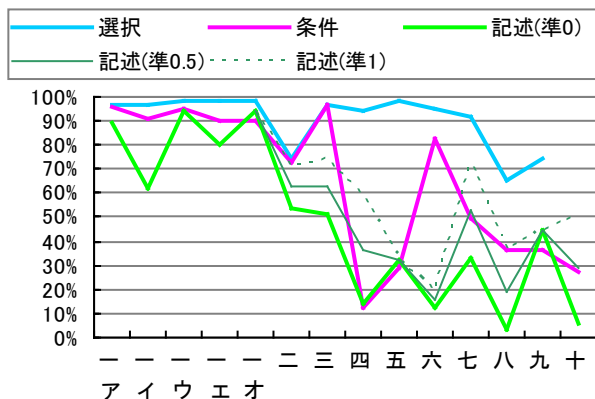


図 2 2012 年度 国語 (形式別正答率)

答の配点と同じ配点を与えた場合(準 1)、正答の配点の 50%の配点を与えた場合(準 0.5)も併せて示した。準正答の配点の与え方によっては、記述式が条件式よりも正答率が高くなる設問があることが確認できた。

- ⑥ 調査結果[数学]: 数学では、選択式、大学入試センター試験に代表される穴埋め(マーク)式、記述式の 3 形式の比較を行った。問題冊子は、表 4 に示すように、各形式 2 題ずつの計 6 題で構成されている。表 5 は 2011 年度、表 6 は 2012 年度の結果である。国語と同様に、3 冊子の等化は成功し、また、各冊子の受験者集団の等質性が担保されたといえる。ただし、受験者の所属大学の内訳は、国立大 A(旧帝国大学、東京工業大学)、国公立大 B(A を除く国公立大)、私

表 4 数学の問題冊子の内容と構造

| 問題番号(配点) | 内容            | 解答形式 |      |      |
|----------|---------------|------|------|------|
|          |               | A 冊子 | B 冊子 | C 冊子 |
| 1 (30)   | [1] 整式の除法     |      |      |      |
|          | [2] 展開式(虚数単位) | 選択   | 穴埋め  | 記述   |
|          | [3] 確率        |      |      |      |
| 2 (30)   | [1] 図形と式(領域)  | 穴埋め  | 記述   | 選択   |
|          | [2] 論理        |      |      |      |
| 3 (30)   | [1] 対数方程式     | 記述   | 選択   | 穴埋め  |
|          | [2] 放物線とグラフ   |      |      |      |
| 4 (20)   | 曲線とグラフ        | 記述   | 選択   | 穴埋め  |
| 5 (20)   | ベクトルの成分表示     | 穴埋め  | 記述   | 選択   |
| 6 (20)   | 二次関数とグラフ      | 選択   | 穴埋め  | 記述   |

立大 C の 3 グループに分けると、2011 年度は A:237 人(38%), B:154 人(25%), C:235 人(38%), 2012 年度は A:162 人(23%), B:412 人(59%), C:124 人(18%)で、共通問題の得点分布からも、年度間で層が異なり、全体としては 2012 年度の方が学力層が高いといえることに注意する必要がある。これは、2011 年度調査結果において、得点分布が 2 峰になってしまったことから、2012 年度調査では意図的に修正を行った。また、2011 年度調査の結果を受け、2012 年度調査では、第 2 問[2], 第 3 問[1], 第 4 問, 第 5 問については、用語、選択肢の変更等若干の改良を行った。

図 3 は 2011 年度調査、図 4 は 2012 年度調査の設問ごとの正答率を解答形式別に示したものである。半数以上の設問において、記述式の正答率が他の 2 つの解答形式の正答率よりも下回っている傾向がみられるが、特定の解答形式の正答率が高かったり、低かったりする特徴は見受けられなかった。数学の場合は、設問の内容、難易度、調査モニターのレベルに依存する部分があり、そのことは⑦で後述する。

- ⑦ 考察: 共通冊子である共通第 1 次学力試験あるいは大学入試センター試験の過去問からなる冊子と 3 形式が混在している冊子との得点の相関は、国語は表 3、数学は表 5、表 6 の最下段に示すとおりで、相関係数が国語は 0.3 程度にあるのに対し、数学は 0.8~0.9 程度と非常に高い。

国語は、解答形式によるパフォーマンスの違いが、選択式とそれ以外でかなり異なり、選択式の正答率が記述式の正答率を上回る傾向がみられ、同じ問題でも解答形式が異なると、同じ能力を測定しているとは言いがたい部分がある。また、問題によって、個人のパフォーマンスの違いが見られ、1 時間程度の試験問題で国語の学力測定を行うことは難しいことがうかがえる。

表 5 2011 年度 数学 結果

| 2011 数学 | 比較 (150 点) |      |      | 共通 (100 点)      |      |      | 計    |
|---------|------------|------|------|-----------------|------|------|------|
|         | A 冊子       | B 冊子 | C 冊子 | A 冊子            | B 冊子 | C 冊子 |      |
| 平均点     | 80.8       | 86.8 | 89.1 | 56.6            | 52.6 | 55.4 | 54.9 |
| 標準偏差    | 45.5       | 49.6 | 48.6 | 27.3            | 28.5 | 27.1 | 27.7 |
| 最高点     | 150        | 150  | 150  | 100             | 100  | 100  | 100  |
| 最低点     | 0          | 0    | 0    | 3               | 0    | 2    | 0    |
| 人数      | 213        | 208  | 205  | 213             | 208  | 205  | 626  |
| 相関係数    | 0.89       | 0.92 | 0.89 | 共通冊子と比較冊子との得点相関 |      |      |      |

表 6 2012 年度 数学 結果

| 2012 数学 | 比較 (150 点) |      |      | 共通 (100 点)      |      |      | 計    |
|---------|------------|------|------|-----------------|------|------|------|
|         | A 冊子       | B 冊子 | C 冊子 | A 冊子            | B 冊子 | C 冊子 |      |
| 平均点     | 92.0       | 95.9 | 94.0 | 62.5            | 62.5 | 60.3 | 61.8 |
| 標準偏差    | 39.7       | 37.5 | 39.1 | 25.0            | 22.6 | 23.8 | 23.8 |
| 最高点     | 150        | 150  | 150  | 100             | 100  | 100  | 100  |
| 最低点     | 0          | 0    | 0    | 2               | 2    | 2    | 2    |
| 人数      | 240        | 233  | 225  | 240             | 233  | 225  | 698  |
| 相関係数    | 0.79       | 0.77 | 0.77 | 共通冊子と比較冊子との得点相関 |      |      |      |



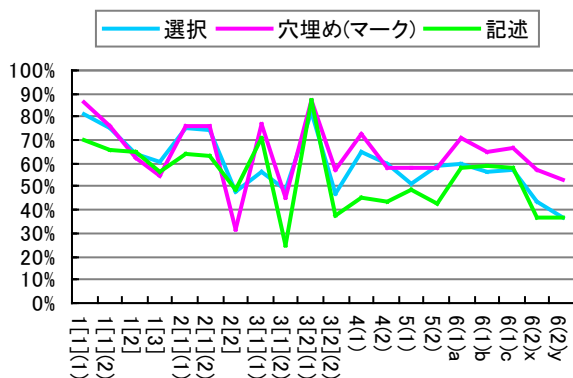


図 3 2011 年度 数学 (形式別正答率)

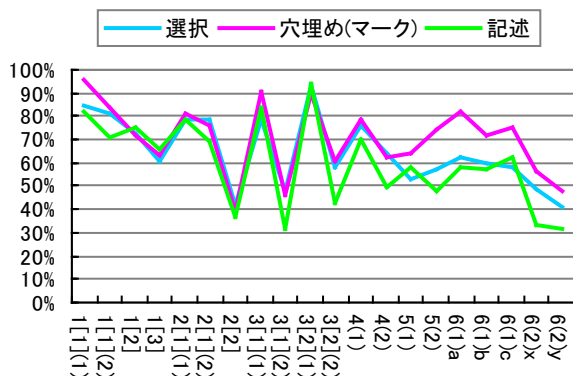


図 4 2012 年度 数学 (形式別正答率)

数学については、共通冊子の得点で、上位層、中位層、下位層の3層に分けて、仔細にみることにする。具体的には、共通冊子の得点により調査モニターを四分位分割し、上位4分の1を上位層、下位4分の1を下位層、それ以外を中位層とした。図5～図8は、層別にみた設問ごとの解答形式別正答率の事例である。上位層及び中位層は、図5及び図6にみられるように、穴埋め(マーク)形式、選択式、記述式の順に正答率が下がるタイプと、図7及び図8にみられるように、選択式の正答率が穴埋め(マーク)式及び記述式の正答率よりも下回るタイプが多く観察される。穴埋め(マーク)式は、解の形態(数値の桁数等)が提示されていると、それが解く手掛かりとなってしまふことに依ると考えられる。特に、上位層では、選択式の場合、条件抜け等によるよくある誤答が選択肢に含まれているとそれを選択して解答する者が一定程度いるのに対し、穴埋め(マーク)式においては、解の形態に適合するか否かが、解を確かめるチェック機能として強く働く場合があり、穴埋め(マーク)式の正答率が、選択式の正答率をかなり上回ることがあることがわかった。下位層については、下位層にとっても正答率が比較的高い設問は、上位層や中位層と同じ傾向がみられるが、下位層にとってある程度難しいと思われる設問は、図5にみられるように、選択式の正答率が最も高く、「まぐれ当り」による正解がある程度含まれると推察される。それ以外については、図6及び図7にみられ

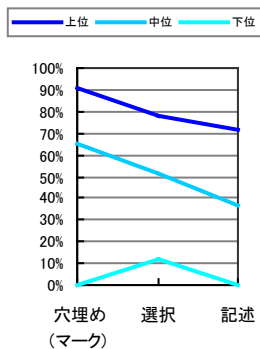


図 6 数学 3[2] (2) (2011)

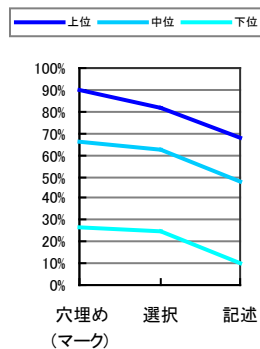


図 5 数学 3[2] (2) (2012)

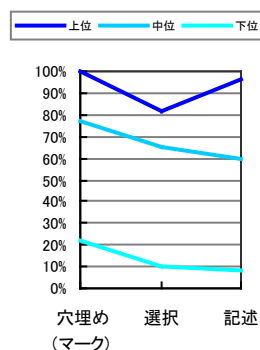


図 8 数学 6(1)c(2011)

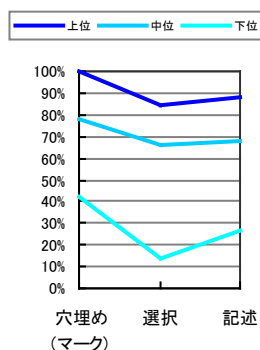


図 7 数学 6(1)c(2012)

るように、記述式の正答率が穴埋め(マーク)式及び選択式の正答率よりも下回る傾向がある。このことから、穴埋め(マーク)式では、その提示の仕方によっては、解を導くための「ヒント」になる場合があり、他の形式よりパフォーマンスが高くなる傾向が強くなったり、選択式では、典型的な誤答が選択肢に含まれている場合、典型的な誤答に誘導される傾向が強くなったりすることが実証的にわかった。改めて3つの形式を比較してみると、記述式によって広範な能力が測れることは言うまでもないが、上位層における結果からみて、穴埋め(マーク)式が選択式よりも必ずしも評価されるとは言い難く、選択式でも、選択肢の工夫如何によっては、記述式に近い数学の能力を識別することも可能だと思われる。

本研究課題では、過去の調査・検査を基に研究を遂行したが、新規研究課題「高大接続に資する多面的・総合的な学力評価・測定を行うための新たな技術的基盤の構築」基盤研究(A)(課題番号25242016)において、新たな試験の開発を組込み、本研究課題をより発展させた形で継続的に研究を行っている。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

安野史子, 浪川幸彦, 森田康夫, 三宅正武, 西辻正副, 倉元直樹, 林篤裕, 木村拓也, 宮埜寿夫, 椎名久美子, 荒井克弘, 村上隆; 解答形式とパフォーマンスに関する実証的研究, 大学入試研究ジャーナル, 査読有, No.23 2013, pp.143-150.

安野史子; 旧課程と現行課程における高等学校数学の科目履修状況について, 日本数学会誌, 査読有, 第93巻第5号, 2011, pp.12-22.

[学会発表] (計2件)

安野史子, 浪川幸彦, 森田康夫, 三宅正武, 西辻正副, 倉元直樹, 林篤裕, 木村拓也, 宮埜壽夫, 椎名久美子, 荒井克弘, 村上隆; 解答形式とパフォーマンスに関する実証的研究(1), 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第7回大会, 2012.6.1, 岡山コンベンションセンター.

宮埜壽夫, 安野史子; 解答形式とパフォーマンスに関する実証的研究(2), 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第7回大会, 2012.6.1, 岡山コンベンションセンター.

[その他] (報告書)

安野史子; "試験問題の形式とパフォーマンスに関する実証的研究", (2014), 刊行予定

安野史子; "戦後日本における全国規模テスト改訂増補第2版", (2013.3), pp.1--557

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

安野 史子 (YASUNO, Fumiko)  
国立教育政策研究所・教育課程研究センター 基礎研究部・総括研究官  
研究者番号: 00370081

### (2) 研究分担者

木村 拓也 (KIMURA, Takuya)  
九州大学・基幹教育院・准教授  
研究者番号: 40452304

倉元 直樹 (KURAMOTO, Naoki)  
東北大学・高度教養・学生支援機構・准教授  
研究者番号: 60236172

林 篤裕 (HAYASHI, Atsuhiko)  
九州大学・基幹教育院・教授  
研究者番号: 70189637

浪川 幸彦 (NAMIKAWA, Yukihiko)  
椙山女学園大学・教育学部・教授  
研究者番号: 20022676

### (3) 連携研究者

荒井 克弘 (ARAI, Katsuhiko)  
独立行政法人 大学入試センター・教授  
研究者番号: 90133610

河合 久 (KAWAI, Hisashi)  
国立教育政策研究所・教育課程研究センター 基礎研究部・総括研究官  
研究者番号: 30214589

椎名 久美子 (SHIINA, Kumiko)  
独立行政法人 大学入試センター・研究開発部・教授  
研究者番号: 20280539

柴山 直 (SHIBAYAMA, Tadashi)  
東北大学・教育学研究科・教授  
研究者番号: 70240752

鈴木 誠 (SUZUKI, Makoto)  
北海道大学・高等教育推進機構・教授  
研究者番号: 20280539

塚原 修一 (TSUKAHARA, Shuichi)  
関西国際大学・客員教授  
研究者番号: 00155334

遠西 学 (TONISHI, Manabu)  
目白大学・社会学部・助教  
研究者番号: 60611556  
(平成22年度より連携研究者)

中村 直人 (NAKAMURA, Naoto)  
千葉工業大学・情報科学部・教授  
研究者番号: 20201676

中山 迅 (NAKAYAMA, Hayashi)  
宮崎大学・教育学研究科・教授  
研究者番号: 90237470

西辻 正副 (NISHITSUJI, Masasuke)  
奈良学園大学・教授  
研究者番号: 40370085

鳩貝 太郎 (HATOGAI, Taro)  
国立教育政策研究所・名誉所員  
研究者番号: 10280512

松原 静郎 (MATSUBARA, Shizuo)  
桐蔭横浜大学・スポーツ健康科学部・教授  
研究者番号: 50132692

三宅 正武 (MIYAKE, Masatake)  
名古屋大学・多元数理科学研究科・名誉教授  
研究者番号: 70019496

宮埜 壽夫 (MIYANO, Hisao)  
独立行政法人 大学入試センター・研究開発部・教授  
研究者番号: 90200196

村上 隆 (MIYANO, Hisao)  
中京大学・現代社会学部・教授  
研究者番号: 24530926

森田 康夫 (MORITA, Yasuo)  
東北大学・教養教育院・総長特別補佐  
研究者番号: 20011653

山田 兼尚 (YAMADA, Kanehisa)  
国立教育政策研究所・名誉所員  
研究者番号: 40000070

山田 文康 (YAMADA, Fumiyasu)  
静岡大学・情報学部・教授  
研究者番号: 40158217